書評　ジョアン　ロドリゲス原著　土井忠生氏訳「日本大文典」

ロドリゲス日本大文典の読後感

岡本良知

本年出版された土井博士のロドリゲス日本大文典の訳業は、国語外国語の深い学識に基づくものであるから、わたくしの如き、国語の門外漢であり、外国語にも特別の智識を持たない者にこれを論評する資格などがあるはずがない。然し折角の依頼であるから、別に執筆せられるといふ国語の専門学者の驥尾に付して、粗末ながらわたくしだけの読後感といふやうなものを述べさせてもらうことにしよう。

原著者ジョアン・ロドリーゲスが、一六〇三・四年の間に出た耶蘇会版の日葡大辞書の主要な編纂者であり、この大文典の著者であることは早くから知られてゐた。その上今世紀に入って発見された未刊の浩瀚な日本教会史をも著したことがわかって来た。もっとも教会史の方は、江戸幕府が一六一四年に吉利支丹迫害を始める直前にマカオへ避難してから稿を起し逝去した一六三四年まで執筆し続けたものである。辞書や文典に収載されてゐる実におびただしい数の内外古今の学芸や社会などに関する語彙と説明とが、決して智識の羅列でないことは、日本教会史第一編の総説によって更によく確かめられる。ロドリーゲスは国語の達識者であるばかりでなく、当代稀な日本の学術・技芸・政治・法制・経済などの精通者であり、見識ある批判者であった。その意味では恐らくは当代耶蘇会士中の第一人者であったろう。その一生の行路については、既に土井博士を始めとし、ドイツのシュールハンマー師、イギリスのボクサー教授などがしばしば発表した著書や論文によって委細が知られるから、更めて説く必要もあるまい。

訳者の土井博士については、わたくしは直接の面識を持たない。これまでに度々公にせられた著書論文を通じて、ロドリーゲスの文典・辞書の研究に没頭せられること二十余年に及び、ポルトガル語などの外国語にも通達されてゐることを知り、その研究法の精確とロドリーゲスを理解することの深さとに敬意を懐いてゐる。

わたくしもロドリーゲスの大文典の一部分ではあるが、かってそれに眼を通したことがある。今旅さきにゐて、その写真副本が手もとにないから確かめられないけれども、記憶によれば、その説明文はかなり煩雑にしてまはりくどいので、二度も三度も読み直さねば了解し難いところも少くはなかった。それは三・四百年前のポルトガル語が現代のそれとひどく変ってゐるからといふわけではない。またロドリーゲスが面倒な文を書く人であったからといふのでもないことは、日本教会史の達意ある叙述に

照してわかる。それよりも、前例も規準もない当代の国文法を、西欧人たる彼が分析し定義を下す困難な最初の経験を嘗め、しかも西欧より渡来して間もなく不慣れな日本語を習得しなければならない若い宣教師達に理解させるのに、全く構造の違ふ西欧の文法に対照しながら説明するため、叮寧にして煩雑な叙述を余儀なからしめたのであらう。土井博士はこの煩雑にしてまわりくどい説明を巧みに、かつ確実に訳してゐる。さりとて原文に即し過ぎて意訳をしたといふところはないやうである。この種の翻訳は、当代の国語の智識は当然として、通り一遍にポルトガル語を知った人では到底企て及ばないことである。その点において、土井氏が「訳者として私の外国語の智識は、原文を正しく翻訳するに十分でない。」と例言中でことはってゐるのは謙遜の言であると思ふ。むしろ三百五十年前のこの文典を訳し得る学者は日本において、いな世界においても土井氏が唯一人適任者であると断言してさしつかへがない。

それでもこの訳書には少しわかりにくいところがある。現代の整頓した国文法と対照して原文の説明に余り曲折がある部分であり、それだけにまた原文の姿をよく伝へてゐるともいへるのであらう。

訳文とは別に、訳語についても土井博士は苦心せられたに違いない。わたくしの記憶する限りでも、文法上の用語が今日の意味とは違って使はれてゐるのが少くはなかった。この訳書によって訳者の苦心の例を挙げれば、artigo は今は冠詞であるが、ロドリーゲスは国語の名詞に連なり、その格を支配する助辞に用ゐたので、これを格辞と訳され、nominativo を今は主格としてゐるが、この訳書では格変化と訳されてゐる。不定法以外の動詞の用法を意味する modo finito は、今は、限定動詞といはれるが、これを定法動詞とせられたのも見識ある訳語である。pronome primeprimitivo はその語意のままに原形代名詞と訳されてゐるが、今の人称代名詞のことであらう。措辞法とでもいふべき syntaxis に統辞論の訳語があてられたのも、もっともの理由がある。その他にも土井氏独特の訳語が見られる。それは皆原文において特別の意味や用法に従ふものであるから、訳者の熟慮選択がこれらによって察せられる。通り一遍に読めばこれらの訳語がそれ程よく注意されないかも知れないが、この文典の真意はその間のことを留意して初めて理解が深められるに違ひない。

この訳書で訳語だけを見ると誤解されるかも知れぬと思はれるものが稀にある。駄足ながらその二・三の例を指摘すれば、三二九頁に、主語のない非人称動詞のときこれをポルトガル語で lese, falase などといふ如きであるとされ、それらのポルトガル語に読む、話すなどと訳されてゐる。然しそれは一般に読まれる、話されるなどを意味する再帰動詞であるから、そのまま訳出した方が適切である。四二五頁に、分詞こそに当る衛語の例として列挙した語のうち eis que にそれ見よ、aum por isso にそれだからと訳してあるが、前者は××こそさうだ、後者はそれだからなほさらの意味だといふ方が正しいし、またよく理解もされるだらう。(この aum はイスパニヤ語 aun をとったのでポルトガル語ではない。当時でもポルトガル語では殆んど使はれなかった。)その他にもそのやうなものが少しは見えるけれども、土井氏もよく承知の上でそれを採ったのであらう。つまりはいひ

足りないかどうかといふだけことであるが。

この書の優れた価値は翻訳の立派さだけにあるのではない。その他にも、各頁の脚註に見える原書所引の書名の錯誤や欧文綴字の書き違へを正すといふやうな厳密な修訂・難読のローマ字書き引用文を一つ一つ復元し、これに原典の文を対置することなど、その用意の周到慎重などにもあるが、それは一見し何人も心付くことであらう。

なほこの訳業の完成が土井博士の大文典に関する造詣の全部ではないことをいひ添えておかう。といふのは、この書を以て大文典の厳密・忠実な翻訳として学界に提供されただけであって、文典の内外に関して多年蓄積された研究や見解はそこに発表されてゐないからである。前に述べた如く、既に発表された著書や論文によっても、その一斑をうかがひ知ることはできるが、恐らく近い将来にそれをまとめて公刊されることであらうし、またそれを切に期待したいものである。